

# ひまわりばたけ



172号

「私の生教育 Part II」「瓢鰻亭は今」「耳納の里便り」「田舎日記」「催し物」

## 私の生教育 Part II

～お母さんは命がけであなたを産みました～

内田 美智子



昨年12月16日に新刊『お母さんは命がけであなたを産みました』16歳のためのいのちの教科書』が出版された。出版社は今までの西日本新聞社ではなく、『青春出版社』この出版社には永久不滅のベストセラーがあります。ほとんどの人がお世話になったと思われる『デル単』こと『受験に出る英単語』。

4年前「ここ」を出版した後、いろんな出版社から連絡をいただきました。でもこの出版社にも気持ちが向かず「ここ」の次の著書は考えもつかなかった。断り続ける中でいくつもいただいた手紙の中に、なんとなく断る気になれず差出人と会う約束をしたのが『青春出版社』の編集者でした。他の人と何が違ったかといわれてもこれといったことは思い浮かばず、直感としか言いようがありません。

敢えてあげるなら、字がきれいだったワープロではなく手書きだったことと、文章からにじみ出てくる誠実さと、「ここ」を読み込んでくれたことでしょうか。そして何より、若者を対象にした出版物を多く手がけ、私とも若者向けの書籍を出したいという思いに動かされたのだと思います。

あれから2年もの月日が経ちましたが、やっと出来上がりました。16歳のためのいのちの教科書：編集作業中ずつついていた仮のタイトルです。でも最後に、2年間ずつと付き合ってくれた編集者が

「内田先生がいつも子ども達に向けて言われる『お母さんは命がけであなた達を産んだんだよ』という言葉がずっと離れません。タイトルにいいですか？」の一言で決まりました。出会いとは不思議なものです。何かに導かれるようにして事は進んでいくのだなあ〜と実感しています。

どうせ俺なんか：どうせ私なんか：産んでくれて頼んだ覚えはない生きててもしょうがないし：そんな『自己肯定感』の低い子ども達に読んでほしい。子育て大変。めんどくさい、忙しい：産まなきゃよかった：そう思いながら子育てしている母さんたちに読んでほしい。自己肯定感が低く自暴自棄になっている子どもにどのような手を差し出したいのだろうかと思っている先生方に読んでほしい。そんなことを思いながら書きました。

(助産師)



瓢鰻亭・ひまわり子ども 〒824-0121 みやこ町豊津 326-1

TEL: 0930-33-8080 FAX: 0930-33-8081 <http://sunny-himawari.ciao.jp>

どこにいても 必要な本が手に入ります 次のホームページ・アドレスから アクセスして下さい。 <http://www.e-hon.ne.jp/SHOP81986>



## 瓢鰻亭は今

遅ればせながら初春のお喜びを申し上げます。

毎年ですが、今年こそはと心に誓うものがあり、その一つに「ひまわりばたけ」をせめて20日までに印刷に回そうというのが筆頭です。ともかく頑張りますのでどうか皆さまお見限りなくよろしくお願いいたします。

瓢鰻亭の朝夕はあい変わらず鳥の鳴き声に包まれておりますが、なんだか鳥の様子が例年と違って、いつもの冬鳥が姿を見せないのです。ヒヨドリも少なく、おかげでブロッコリーやキヤベツの葉っぱが食べられもせず青々としたままです。

「瓢鰻亭・ひまわりこども」のホームページに「うちのツグミ」の拙い写真の紹介をしたこともありまうように、ふとしたはずみから餌付けをしてしまったツグミがおりました。この七八年というもの秋から春にかけて必ず毎朝餌を求めて、お決まりの枇杷の木の枝を揺らして、鳴き声を上げるのです。ですから、十一月になると鳥の声が気になってくるのです。そして、待つていたうちのツグミがこの季節最初に現れたのは十一月七日でした。例年そうですが、最初の頃は警戒心が強く、餌を撒いてもなかなか枝から降りて来ません。まあ、そのうちおねだりに毎日来るだろうと、その日は気にも止めていませんでした。ところが、その日を境に全く姿を見せません。再び現れたのは師走の半ばでした。しかしそれ以来また来なくなつたのです。友人でバードウォッチャーの渡辺ひろ子さんもやはり、渡り鳥の事情がおかしい。と、彼女の通信「づれづれ草」に書いてありました。その話を他の友人にしますと、今年には野山に餌が十分あるのではないか、なぜなら、いつもの年なら鳥たちにお正月前に食べられてしまう南天やナノミの実がいつまでもふさふさと赤い色鮮やかに実つたままだし、どんぐりの多いことなどから考えるとそうじゃないかと言います。別の友だちは、

これは地球環境の変化のせいではないかともいいます。

ところで、瓢鰻亭は昨年六月から子ども連歌を始めました。人々のあらゆる平安を祈って産土の上に奉納されてきた連歌は百韻と言つて百句を一卷としていますが、五〇句で半百韻、四十四句で世吉、三六句で歌仙といひそれぞれを一卷とした短縮型もあります。毎年行橋市主催の連歌大会の中学生、高校生の座では世吉を巻きますが、この度始めました子ども連歌は小学1年生から七、八人、時として学齢前のお子さんも参加することがあり、慣れるまでは歌仙を巻くことにしました。

経験のあるおとなでも半歌仙にかなり時間をとるのですが、歌仙の半分の一八句を二時間足らずで彼らは付けてしまひます。近年子どもたちの語彙の数は年々少なくなつていようようです。高校生の座でも「霞たなびく」の説明をしますとまず「霞」が分かりません。次に「たなびく」これがまた難しいのです。「煙がゆらゆら揺れながら横に流れていくことがあるでしょう。字で書くと柵引くですから」と言つと、「煙をみたことがない」と言ひます。「それじゃ、お父さんが煙草を吸うときに煙をはくでしょう」と言へば「煙草は吸ひません」それはいいことです。で説明に時間がかかります。

連歌は森羅万象すべて、つまり人間に関わるあらゆる事、天然自然のあらゆる現象を詠みこみます。が、何より天然自然そのものに畏敬の念を持つことから全ての事象を受け入れ世の平安、人々の安寧を自ずと願うことに繋がっていきます。地球温暖化の現、世の様々をしつかりと見据え、先祖からの言葉を噛み締めながら子ども連歌を楽しみたいとおもつています。

今年もどうぞよろしくお願いいたします。

前田 賤



藤田 小百合

明けましておめでとうございます。年末の慌しさとお正月の三が日を終えて、日常の生活が始まりました。昨年の東日本大震災や福島原発の事故以来、今年ほど家族揃って元旦を迎えることができた幸せを感じたことはありませんでした。今まで当たり前のように繰り返してきたことが、一瞬にして無くなるなんて考えたこともありませんでしたから。決して大変な状況は変わることはないのですが、少しでも「笑顔と安らぎ」が戻ってくることを願うばかりです。

さて、年末は、長女の17歳の誕生日でした。出産予定日は私の誕生日と同じだったので楽しみにしていたのですが、なかなか生まれてくる気配がなく、25日のXmasになっても何も変化なし。12月に入ってすぐに実家に帰っていたのですが、私はふと思いついて、始発の久留米行きの特急に乗っていました。なかなか陣痛というものがこないで、私より先にお産を経験した友人の「予定日近くになったら、少し動いていた方がいいよ。」という言葉が頭に浮かんだからかもしれません。「そうだ！久留米に帰ってみよう…」と思ったのです。父にも母にも内緒で（もちろんダメって言われますから）、主人には来たらダメって言われまいように、電車の中から電話をして、駅まで迎えにきてもらいました。今にして思えば、何て恐ろしいことをしたのでしょうか。初産でお産に関しては全く無知だったにしても、予定日を大幅に過ぎて、一人で電車に乗るなんて。電車の中で陣痛が始まらなくて本当によかった…。家に着いたら一息ついて帰ろうとは思っていたのですが、それよりも早く、実家の母に感ずかれてしまい、電話がかかってきました。受話器の向こうから「何ばしよるとねいつ生まれるかわからんとに…：電車

の中で陣痛でもきたらどうするかね…」心配やら怒りたいやら、複雑な様子の母の声が飛んでいます。その後、主人の運転する車で実家まで送ってもらいました。その甲斐あってかどうかわかりませんが、その日の夜からお産の兆しがあり、これつてもしかして陣痛？という痛みがきて夜中に病院へ。そこでまた、無知の恐ろしさなのですが、陣痛といつてもまだそこまで痛くなかったため、自分で運転し病院まで行ってしまったのです。母も一緒に車に乗ったのですが、母は車の免許を持っていません…。寝ている父を起こして運転してもらった方がよかつたらうにと今頃になって思うのですが、その夜はめずらしく霧がたちこめていて、辺りの視界がせまく、出産に向かっている自分が何だか不思議な空間にいるような気持ちだったことを覚えていきます。病院に着き、順調に陣痛がきて、「お昼には生まれますよ」と言われたのに、だんだん陣痛が弱くなつてきて、結局、夕方から陣痛促進剤を使つてのお産となり、女の子が生まれました。

あれから弟も二人増えて5人家族になりました。子ども達の誕生を改めて振り返ると、本当に感謝です。日々の繰り返しの中に沢山の笑顔を運んでできています。先日、冬休み明けの部活から帰ってきた長男が帰宅し、開口一番「やっぱ笑わんといかんね。ああー今日は楽しかった。笑うとスツキリするね！ママ 何でもいいけん笑うといばい。アマル浜口は朝一番にワツバツハつて笑うげな…」と満足そうに私の前を通り過ぎて行きました。よほど、久しぶりに会う友人との会話ははずんだのでしょうか。

いつかは巣立っていく子ども達と笑顔で暮らしていることに感謝しながら、今年も焦らず歩いていきたいと思っています。本年もよろしくお願い致します。

田舎日記 三五 く 無雙眞古流 く

光畑 浩治

京都の銀閣寺(慈照寺)に伝わる花の無雙眞古流は、福岡県京都郡みやこ町勝山新町の木村家に関わりある花の一流であった。郷土では、忘れられ、知る人も少ない。

古書によると、八代足利義政(同仁斎一花)を流祖とし本山家元は慈照寺住職だが、木村家は「代々花道の理と術を正確に伝える宗家・主管者」であった、とある。

宝暦十四年(一七六四)に足利十八代千葉官蔵(一国庵花頭)から木村徳右衛門が名跡を受けて、南壽庵花敬と号した。号は南壽庵―花樂堂―雪林堂―花樂堂と移り十一代花樂堂雪宗までの記録がある。

昨年暮れ、地域おこしをすすめるNPO関係者や地元有志、みやこ町役場職員など十数人のボランティアによって新町の木村家の先祖墓地清掃が行われた。朽ちた大木が倒れ、墓への階段は落ち葉で埋もれていた、まわりを覆った雑草が取り除かれていくと、藪の中から宗家数代の墓が現れた。その墓に暖かい陽の光が当たった。

郷土で埋もれていた一つの文化遺産が姿を見せた。

現在、無雙眞古流は、慈照寺の花方 珠寶さんによって復興作業が進んでいる。

ある雑誌の対談で、珠寶さんは「無雙眞古流は江戸の中頃に豊前で創流された生花の一流・草木花一本にも命が宿る・自然に対して礼をつくす行為が花を供えるということ」と語る。またフランスのパリで花を教え、銀閣寺で全国から訪れる多くの人々の指導に当たっている、高校生から八十歳のお年寄りまで、千差万別だが肩書き、性別、年齢を超え、書齋の同仁斎の名前のように一視同仁＝平等という言葉・素晴らしいです」と珠寶さん。

そして、慈照寺の花が「流派であつて流派でない、家元制度というのがなじまないですね」の質問には「東山の立て花は『真、そえ草、下草』というそれぞれの草木が自立して適材適所におり、互いに補い合つて平和な世界を花瓶の上に現わすんです」と答える。納得だ。

かつて木村家が日本の生け花を継承し、支えた心を知つて独特な花の術が、今も伝わっていることを郷土の人々が大切に想い、さらに伝え、広めていければと願う。

☆☆☆ 催し物 ご案内 ☆☆☆ 2012

1月

- 4日(水) ひまわり連歌(安藤宅)
- 6日(金) 子ども連歌百人一首大会
- 26日(木) 梅原菜穂子と井戸端会議
- 27日(金) 地域通貨の会/19:00

ピラティスの会 毎週木曜日/19:30 ( )  
 ギタ|教室 毎週土曜日/13:00 ( )  
 梅原菜穂子と井戸端会議 毎月第4木曜日  
 ※ 特に記入のない場合は瓢鰻亭で開催

瓢鰻亭のホームページ:  
<http://sunny-himawari.ciao.jp>

2月

- 11日(土) 子ども連歌18:00 ( )
- 15日(水) ひまわり連歌18:00
- 23日(木) 梅原菜穂子と井戸端会議
- 24日(金) 地域通貨の会/19:00

ピラティスの会 毎週木曜日/19:30 ( )  
 ギタ|教室 毎週土曜日/13:00 ( )  
 梅原菜穂子と井戸端会議 毎月第4木曜日  
 ※ 特に記入のない場合は瓢鰻亭で開催

～担当より一言～

新たな年(2012年)の幕開けです 今年地球上で大きなパラダイムの変化が起きそうな予感があります 帰るべき基地のない宇宙船「地球号」は どこを目指して進むのでしょうか? (え)